

01 2016・2017 年度の活動

東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボ(以下「コミュニティラボ」)は、2016年の活動開始から、調査や企画・実践による地域の皆さまや役場の方との交流・意見交換、それらを踏まえた将来像の検討など、様々な活動に取り組んできました。こちらのパネルでは、これまでコミュニティラボが行ってきた活動とそこから得られた成果と課題を年度ごとに振り返ります。



コミュニティラボ設立

コミュニティラボ設立の経緯

東京大学工学部都市工学科では、2014年度から授業の一環として小布施町での地域調査および政策提言に取り組んでまいりました。こうした経緯から2016年6月、小布施町と東京大学先端科学技術研究センターとの間で小布施町のまちづくりに向けた協働の場となる「東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボ」が設立されました。

コミュニティラボの活動・地域との協働

コミュニティラボでは、コミュニティの再生・活性化に関する調査研究と、少子高齢化の進展に伴う諸種の課題に対応したまちづくり事業の実践を活動として進めています。コミュニティラボでは調査に対するご協力やイベントの実施を通して、地域の皆さまのお声を伺い、小布施町役場や長野県庁等と連携する協働の仕組みを作ることで、調査・研究の成果を地域に還元しています。

空き家外観目視調査

農村コミュニティの再生・活性化へ向けた糸口として、町内全域を対象に空き家の実態調査を行いました。集約した空き家データは町へ提供し、移住・定住政策へ活用されます。

【実施日】2016年10月22日～26日、11月18日～20日

【調査対象】小布施町内全域

【調査手法】外観目視・聞き込み

【結果】町内全域で253件の空き家を確認した

町の課題と空き家調査

小布施町は以前より移住・定住を促進する取り組みを行っていましたが、その中で希望者に紹介できる物件が少ないという課題があがっていました。

一方で空き家調査は、プライバシーとの兼ね合いなどの要因から行政としてもなかなか実施しづらいものでもあります。そこで、コミュニティラボと小布施町が共同で町内全域の空き家調査を実施しました。

調査概要

数人ごとの調査班に分かれ、大字の区域ごとに徒歩で回りつつ、①自治会長へのインタビュー、②現地での目視調査、③近隣住民の方へのインタビューを実施しました。

顕在化する新たな課題

調査の結果253件の空き家が判明し、また事前に空き家ではないかと言われていた建物のうち62件に関しては空き家でないことも確認されました。確認された空き家は地理空間情報システム(GIS)を用いて空間情報化し、その後の活動や小布施町の政策立案に利用されています。

今回、空き家かどうかという情報に加え、所有者の連絡先も同様に調査しましたが、253件中165件の空き家(右上表中の空き家④)について所有者が確認できませんでした。自治会での結びつきの強い小布施町においても、所有者不明の空き家の問題が浮き彫りとなりました。

なお、本調査は外観目視と聞き込みによるものであり、全ての空き家の情報を正確に把握できているとは言えない点、今後の課題として挙げられます。



▲東大チームメンバーの集合写真

地区	空き家①	空き家②	空き家③	空き家④	計
押羽	0	0	1	6	7
雁田	0	3	4	8	15
山王島	0	3	2	5	10
大字小布施	12	8	11	80	111
大島	0	3	1	7	11
都住	4	2	5	26	37
飯田	1	2	3	3	9
福原	1	2	9	10	22
北岡	0	2	1	0	3
中松	1	5	2	20	28
集計	19	30	39	165	253

▲空き家調査結果

- ※①所有者との連絡がつく
- ②所有者に連絡できる方がいる
- ③所有者は大体わかっているが連絡先不明
- ④所有者不明



▲集計作業の様子

基礎調査を中心に行い小布施町の特徴を把握し、今後の方針・対象を決定

モデル地区を都住地区に決定

地区をフォーカスした理由

- 小布施町全体から地区をフォーカスした理由は2つあります。
- 1つ目は、エリアを絞った方がより問題が明確になり、その解決に向けてアプローチが行いやすいからです。小布施町は観光地としての中心部と、暮らしの拠点である周辺農村部では街並みが異なるため、抱える課題も違うと考えられます。
- 2つ目は、小さな範囲にすることによって活動の解像度を上げ、他の地域への応用が可能な知見を得るためです。小布施町全体の計画は定められていますが、さらに細分化された範囲、特に農村部においてはその計画は十分とは言えません。町全体に対する先駆的なモデルが必要だと考え、地区にフォーカスすることにしました。

都住地区を選んだ理由

- 都住地区を選出した理由は2つあります。
- 1つ目は、農村部での取り組みや施策がこれまであまり行われてこなかったためです。修景事業に代表されるように、小布施町中心部では歴史や文化に着目したまちづくりは行われてきましたが、農村部ではあまり見られません。よって、農村部でも固有性・歴史性に着目した取り組みを展開する必要があると考えました。
- 2つ目は農業に対する変化です。農家の高齢化や産業構造の変化が進む中で、農業を生業の中心としてきた地域コミュニティのあり方を再検討する必要があると考えました。

生活実態ヒアリング調査

都住地区(六中矢水エリア)において、どのような営みや繋がりが地域の個性を形づくっているのかを住民視点で探るとともに、地域の課題や将来像を掴むべく、ヒアリング調査を行いました。

【実施期間】2017年12月～2018年2月

【実施場所】都住地区各所

【調査手法】対面形式でのヒアリング

【参加人数】12名

地域の個性は日々の暮らしのなかに

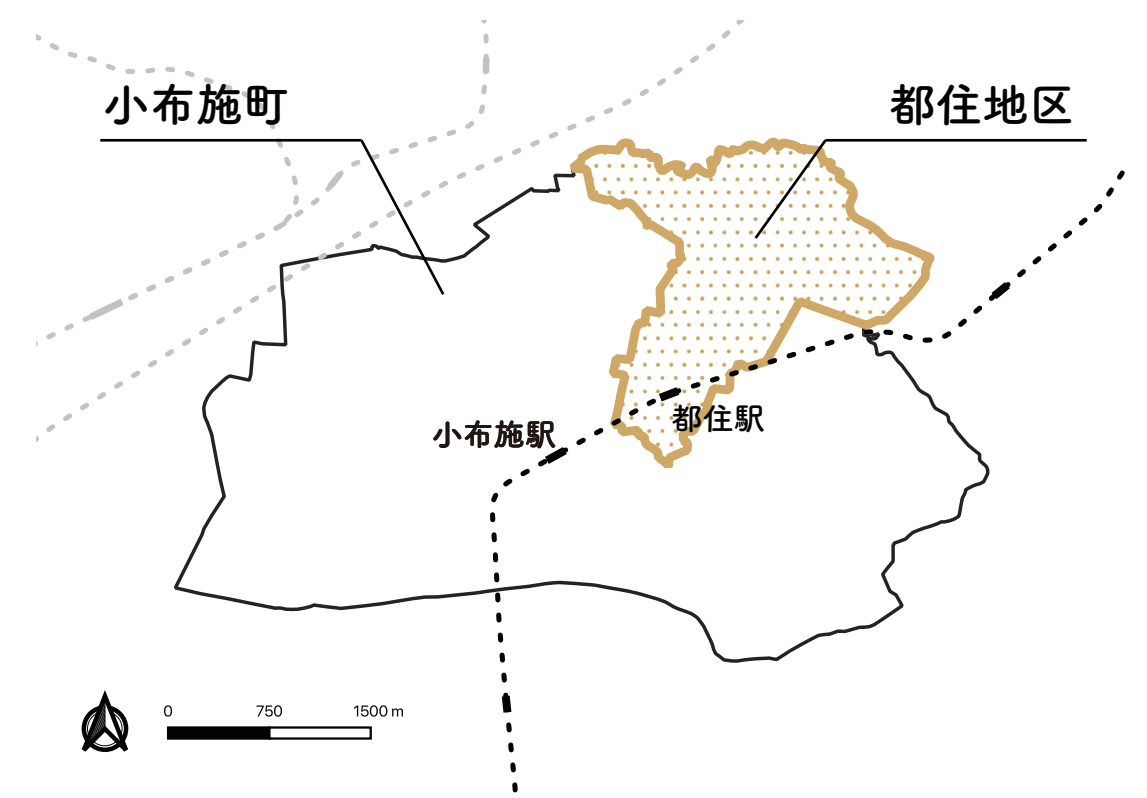
- 地域には、それぞれ受け継がれてきた歴史、文化があり、人々はそのなかでコミュニティを形成しながら、固有の暮らしの風景を作り上げています。こうした地域の個性は将来にわたって守られるべき大切なものです。
- そこで、地域の将来像を描くにあたり、都住地区の個性を形作っている地域性、すなわち「都住地区らしさ」を捉えるとともに、地域の課題を明らかにすることを目指しました。そして、この地域性及びそれを形作る営みや繋がりは、日常生活のなかに現れると考え、様々な立場の方を対象に生活実態についてのヒアリング調査を実施しました。

都住地区の今とこれから

子育て、農業、自治体、近所付き合いなど様々な話題が出たなかでも、お祭りとお宮には多くの方から言及があり、地域のアイデンティティとなっていることが窺えました。

実施日	自治会	人数	属性
2017/12/17	中子塚	4名	男性、農業従事
	六川	1名	男性、農業従事
2018/2/3	六川	1名	男性、農業従事、子育て中
	六川	1名	女性、新規就農で移住
2018/2/4	矢島	3名	女性、子育てを経験
	矢島	2名	女性、結婚を機に移住 男性、高校生

▲ヒアリング調査の日時・対象



▲小布施町における都住地区の位置



▲ヒアリング調査の様子

他にも、四方を囲む山々が心の原風景である、干渉しすぎない距離感が丁度良いなど、都住地区の地域性が次々と見えてきました。

一方で、自治会の疲弊や自動車交通への依存といった課題も浮き彫りになりました。人口減少や少子高齢化が全国的に進むなか、これまでの地域の姿をそのまま維持してゆくのは簡単なことではありません。残すべき、持続させるべき地域性を認識し、改善すべき課題を明確にすることで、都住地区ならではの将来像を描くことに繋げて行きたいと考えています。

02 2018年度の活動

2018年

6月

コミュニティ勉強会
都市計画勉強会

9月

土地利用現況調査

12月

集落全員アンケート

2019年

5月

アンケート結果報告会

7月

コミュニティ勉強会

小布施町において、自治会の集合体である「コミュニティ」という組織単位が担える役割について、都住コミュニティ役員の皆さまとのディスカッションを通して考えました。

【実施日時】2018年6月1日(金)18:00～19:30

【実施場所】六川公会堂

【実施形式】レクチャー・ディスカッション

【参加人数】27名(都住コミュニティの皆さま)



▲ディスカッションの様子

今後の「コミュニティ」の役割とは？

環境・生活安全・福祉・教育の4つの部会に分かれて行ったディスカッションでは、「自治会でできていないところは町が担っている」という意見があり、町が担っている役割が大きいことが分かりました。しかし、今後も小布施町の負担増加が見込まれる中、自治会をサポートする「コミュニティ」の必要性は強まると考えられます。また、子供を対象とした活動は「コミュニティ」単位が求められるのではないかと、河川や駅、土地利用などは「コミュニティ」で共同化できる可能性がある、といった意見も出ました。

さらに、当初想定されていた形とは異なりますが、テーマ型まちづくりの主体として、「やりたいことがある人がコミュニティの範囲で集まる」という方向性も考えられます。中心となる人物の必要性はありますが、「コミュニティ」単位の活動の展開可能性はあると考えられます。

都市計画勉強会

地域の実情に合わせた制度の提案を視野に入れ、地域の皆さまに、地域に適用される都市計画制度の概要や意図を理解していただくため、小布施町における現行の法制度や計画の整理をしました。

【実施日時】2018年6月16日(土)15:00～16:30

【実施場所】六川公会堂

【実施形式】レクチャー・ディスカッション

【参加人数】22名(東京大学の学生4名を含む)



▲レクチャーの様子

勉強会の意義

小布施町では計画的市街地整備や景観保全の面から町域の大部分を市街化調整区域に設定し、無秩序な開発を制限しています。一方、2006(平成18)年には、農村集落の活性化を目指し、既存の集落エリアでの開発が大幅に認められるようになりました。

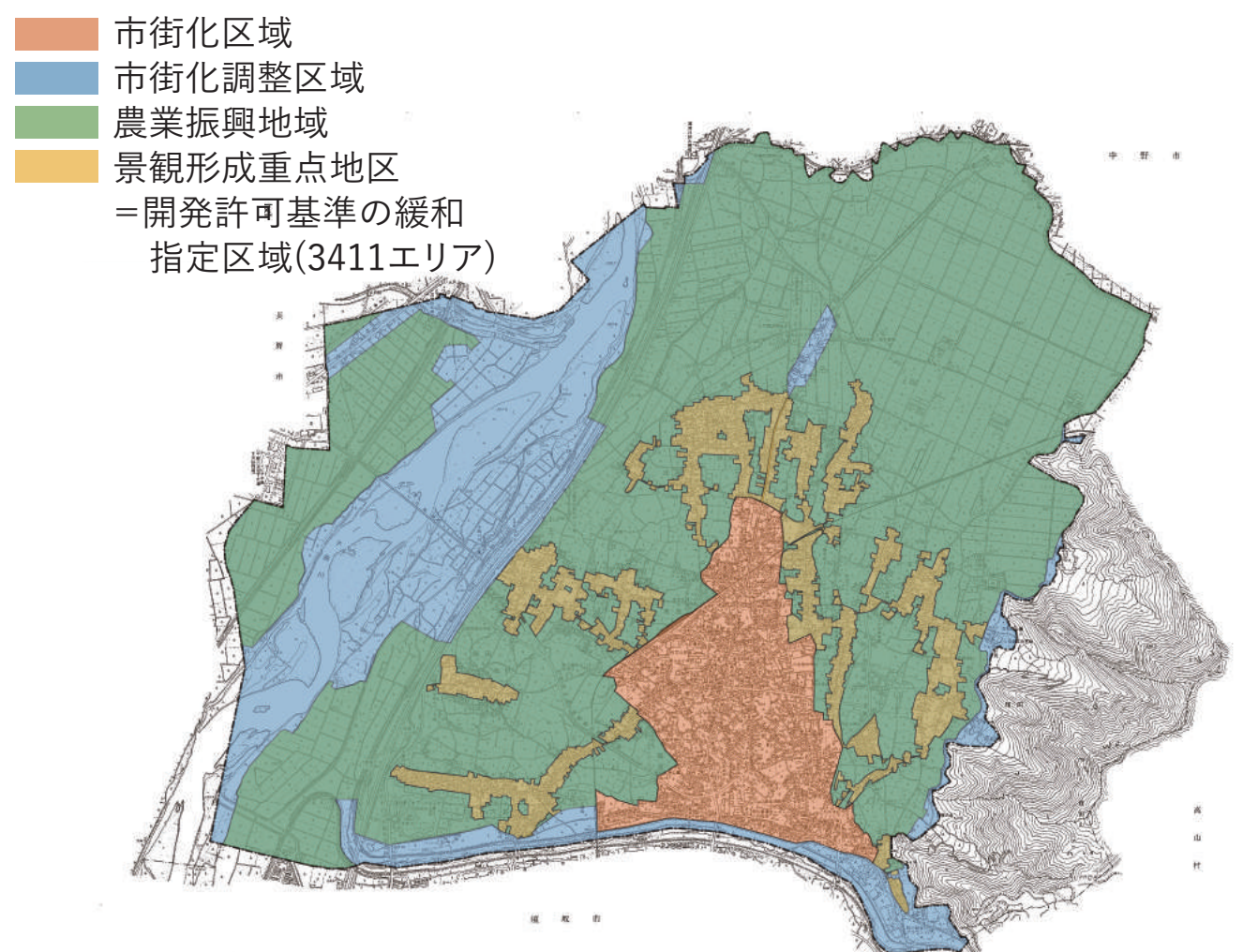
しかし、この制度を設けてから10年以上が経過しているため、改めて制度の概要や意図を理解していただき、また、今後の新たな地域のあり方に合った制度の提案に向けて地域の将来像について意見交換をする目的で、勉強会を開催しました。

これからの制度に向けての示唆

勉強会では、高倉明子氏・塚本哲氏(長野県建設部 都市・まちづくり課)、畔上敏春氏(小布施町 建設水道課)より、小布施町の土地利用や開発に関する制度について説明していただきました。

参加者からは、農業振興だけでなく商工業等の開発も望む声がありました。農村集落部における今後の開発のあり方について、農業や小布施町らしい農村景観を守りつつも、産業構造の転換に合わせた将来像を検討していく必要があると言えます。

また、空き家活用についても活発に意見交換がなされ、無秩序な開発を抑制しつつも地域活力の維持を図るために空き家活用が必要だとの共通認識を持つことができました。



▲小布施町の都市計画制度区域図(本ラボ作成)
目に見えない制度の網が重層的にかかっている

小布施の都市計画・まちづくりへの理解を深め、調査を通して具体的な課題を把握

土地利用現況調査

活動のなかで、維持の難くなる農地を宅地化できないかという意見を頂きました。集落内の農地や未利用地がどれくらいあるのか、地域の土地利用の現況を把握することを目的に調査を行いました。

【実施期間】2018年9月21日(金)～9月23日(日)

【調査手法】本ラボメンバーによる目視調査

【対象地区】都住地区

【結果】計155箇所土地の現況を確認した



▲現地調査の様子

土地利用の現況をこの目で見ると

土地利用の現況は、実際に見てみないと把握できないことも多いため、都住地区の土地がどのように利用されているのか、実際に目で見て調査しました。調査を通して、表のように、都住地区の未利用地の存在などが確認できました。

目視の限界も感じた調査

しかし、目視での調査である以上、接道のない土地については確認できず、各項目の内容も調査員の判断に委ねられ、所有者の意思に反する可能性があるという限界も感じられました。また、「未利用地」であることを確定するには、所有者の意向の把握や所有者情報を参照することが必要であり、そのような「意向」や「思い」を調査するために、集落全員アンケートを行うことにしました。

集落全員アンケート

今後具体的に地域づくりを実践していく前に、地域の皆さまの「今の思い」を丁寧に把握する必要がありました。そこで、「地域構成員全員の思いを問うこと」を目的としたアンケートを実施しました。

【実施期間】配布:2018年12月21日～23日、回収:2019年2月1日～2日

【調査手法】アンケート調査票

【回収数】地区内 世帯票:79(回収率84.0%) 個人票:200(回収率83.7%)
地区外 世帯票:16(回収率28.6%) 個人票:45(回収率46.4%)



▲清水自治会での報告会の様子

地域構成員全員の思いを問うアンケート

地域の将来像を描くには、将来の地域の担い手の意見も必要であること、在外の親族の意向も土地や建物の維持に関わることから、「中子塚自治会・清水自治会内に住む中学生以上全員、また地区外に住む親族」を対象にアンケートを行いました。

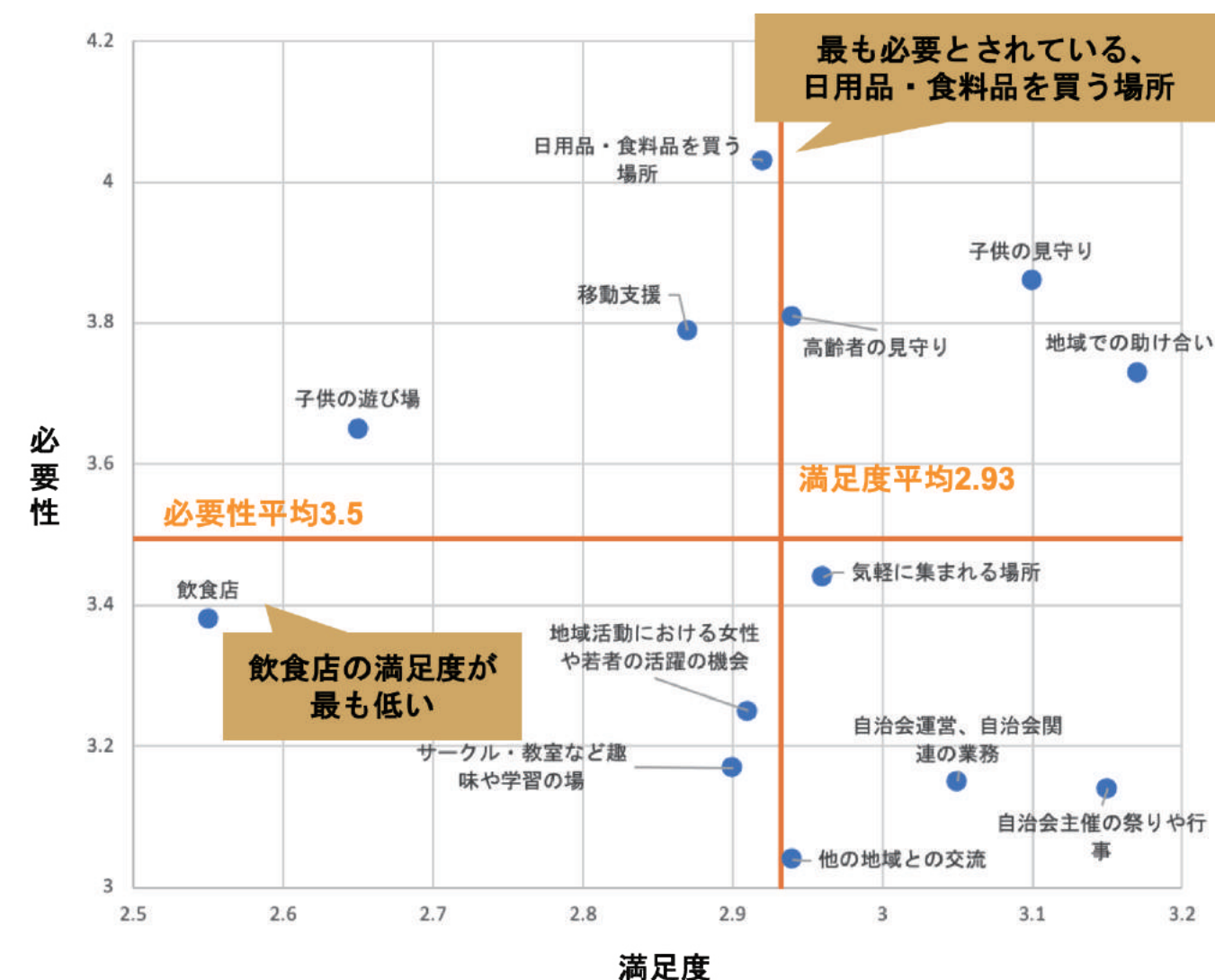
アンケートから見えた、日常生活上の課題、農業継承の課題

日常生活上の様々な要素について必要度・満足度から分析した結果、日用品・食料品を買う場所が最も必要とされていること、飲食店が最も満足度が低く、特に20～30代の女性と10代の男女が必要であるが不満だと感じていることが分かりました。

また農業に関しては、半数程度が後継者がいないと回答した一方で、農業の継続を希望しており、今後どのように農業を継承していくべきかが大きな課題として見えてきました。

結果を共有する地域の皆さまへの報告会

これらのアンケート結果は、中子塚自治会、清水自治会それぞれで結果報告会を開催し、地域の皆さまに共有しました。質疑応答や交流会でも、アンケートの設問に絡んだ内容のお話を多くの方から伺えました。特に「農業」については多くの意見が集まり、地域の皆さまにとっても関心が非常に高いテーマであることが再確認できました。



▲地域に必要なものを必要性と満足度から分析した図
必要性が高く、満足度が低いものは喫緊の課題と言える

03 2019年度の活動

2019年

9月

都住の縁側【入門編】
都住の縁側【実践編】

11月

地区計画勉強会
台風被害復旧作業

2020年

1月

地区計画意見交換会

2月

ふらっとーク

都住の縁側 入門編・実践編

中子塚・清水自治会での集落全員アンケートを受けて、現状あまり活用されていない都住コミュニティセンターを活用し、入門編・実践編の2回のプレイスメイキング「都住の縁側」を実施しました。入門編ではコミュニティセンター活用に向けた企画や準備を行い、実践編では実際にどのように利用できるかを皆さんと考え、実践しました。

【実施日時】入門編：2019年9月1日(日)10:30～15:30

実践編：2019年9月21日(土)10:30～16:00

【実施場所】都住コミュニティセンター

【実施形式】入門編：ワークショップ形式 実践編：イベント形式

【参加人数】入門編：11名(うち、子ども6名) 実践編：44名



▲小布施の郷土料理づくり(入門編)



▲流しそうめんチャレンジ(実践編)

都住コミュニティセンターを活用した居場所づくりを目指して

集落全員アンケートの結果から、都住地区の低未利用地の増加の実態や、「都住駅周辺の賑わい」「家でも学校でもない居場所」などの要望、都住コミュニティセンターがほとんど利活用されていない実態などが明らかになり、都住コミュニティセンターを活用した、人の集まる空間づくりを手がけることにしました。都住地区の皆さまに講師＝「MyStar(マイスター)」としてご参加いただき、一緒にプログラム内容を考えていきました。

このイベントを通して、コミュニティセンターの日常的な利用へ繋がるきっかけとなり、また地域内の他の低未利用空間の活用イメージを提示することを目指しました。

入門編：子どもの居場所へのニーズを認識

入門編では、都住コミュニティセンターの活用に向けて、コミュニティセンターの掃除やりんご箱を材料に椅子や机を制作し、コミュニティセンターで何ができるかを手を動かしながら考える企画などを行い、当日立ち寄りて下さった子ども達と一緒に「学びの場」をデザインしました。

参加してくれた子どもたちは未就学児～小学校低学年の子が多く、一人では遊びに行かせられない子どもたちが安心して遊べる居場所のニーズがあることが分かりました。また、これまでの活動でありアプローチできなかった子育て世代とも関係を築くことができました。

	企画内容	Mystar
入門編	そもそもコミュニティセンターとは？	松本さゆみさん
	小布施の郷土料理を学ぼう！	牧けい子さん 寺島康子さん
	コミュニティセンターを綺麗にしよう！	松本さゆみさん
	コミュニティセンターで何が できるかな？	本ラボメンバー
実践編	縁日の準備をしよう	本ラボメンバー
	流しそうめんチャレンジ	吉田富雄さん
	コミュニティセンターで何が できるかな？	本ラボメンバー

▲各イベントでの企画内容

実践編：多世代交流の場としての可能性

実践編では、使利用できるようにしたコミュニティセンターを、実際にどのように利用できるか、皆さんと考え、実践しました。竹を組み立てて流しそうめんを行った他、トランプや古書(まちじゅう図書館)、落書きやシャボン玉など入門編ででたアイデアを元に、コミュニティセンターで楽しめる様々なコンテンツを準備し、実践しました。

入門編でも参加していただいた子育て世代の他にも、老若男女幅広い層の方々が参加してくださりました。地域の方との会話の中でも、地域の中で知人同士で集まりたいと考えている方が多いことがわかりました。また、小学生以下の子どもたちと年配の方が自然とコミュニケーションする姿も見られ、多世代交流の場としての可能性を感じられました。

入門編・実践編と2回のイベントにより、コミュニティセンターを地域の皆さまにより身近な存在に感じていただけるようになったと感じました。

調査でわかった課題を踏まえ、徐々に企画・実践、具体的方策の検討フェーズへ

地区計画勉強会・意見交換会

より地区の実情に合った計画策定が可能な地区計画の制度を用いることを検討し、行政との意見交換を行いました。都住地区への理解も深まり、「集落地区計画」策定という今後の方針決定につながる活動となりました。

【実施日時】2020年1月17日(金)15:00～17:00

【実施形式】意見交換

【実施場所】小布施町役場2F

【参加人数】9名(長野県・小布施町職員と東大メンバー)



▲学内意見交換会の様子

集落地区計画の可能性に気づいた学内勉強会・意見交換会

中子塚・清水自治会での集落全員アンケートや「都住の縁側をつくろう」の開催を踏まえ、2019年11月からアクションプランの策定に向けた準備として、地区計画について学内で勉強会・意見交換会を行いました。複数回の勉強会を通し、地区計画の制度内容や他地域の事例、都住地区への適用可能性を検討しました。それを踏まえた意見交換を通じて、制度が重層的に存在する都住地区においては、集落地区計画が適しているのではないかとの方針が示されました。

住民の方々と行政との継続的な対話の必要性に気づいた学外意見交換会

学内勉強会・意見交換会を踏まえ、2020年1月17日に小布施町役場で小布施町・長野県のまちづくりに携わる職員の方々と意見交換会を行い、学内勉強会・意見交換会の内容に対して行政視点からのご意見をいただきました。またもう一步まちづくりを進めるために地区計画が必要という認識を共有することができました。さらに地区計画策定に向けた具体的な話し合いの中では、住民の方々のニーズや将来像、農政上の必要性等を丁寧に調査・分析した上で、基本方針や対象エリアを明確にする必要があるとご指摘をいただき、その後のふらっとーク開催等の住民の方々の多様な意見を伺う活動や、行政との継続的な話し合いに繋がる場となりました。

ふらっとーク

地域に対する思いや理想の将来像を住民同士で共有する対話の場を作りました。男性編・女性編を実施し、話しやすい雰囲気の中で参加して下さった方の思いを詳細にヒアリングしました。得られた知見を活動に生かすと共に、今後も継続的に住民の方同士の議論の場を設けます。

【実施日時】 2020年2月8日(土)13:30～15:30、18:00～20:00

【実施場所】 六川公会堂

【実施形式】 ワークショップ・ワールドカフェ方式

【参加人数】 男性11名、女性14名



▲ワールドカフェ方式による議論中の様子

都住地区の今と未来を考える対話の場

地域の皆さまが個人が持つ地域に対する思いや、思い描く理想の将来像を、地域の皆さま同士で共有してもらうことを目的として、都住地区の「今」と「未来」を考える対話の場を企画しました。

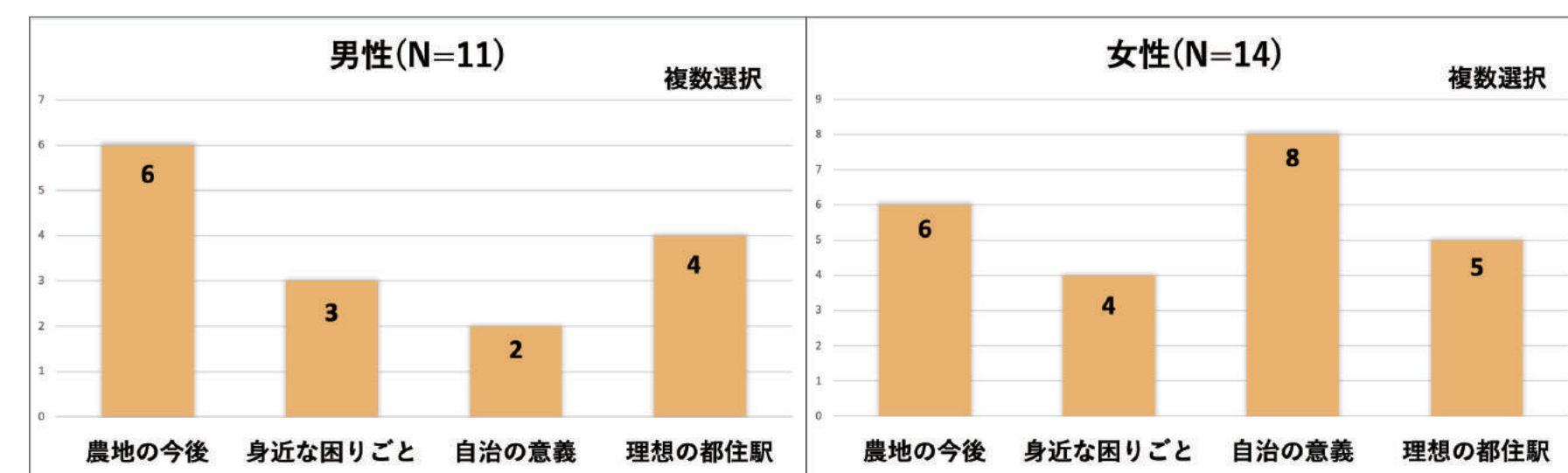
ふらっとークの様子

「農地の今後」「身近な困りごと」「自治の意義」「理想の都住駅」という4つのテーマについて、地域の皆さまに議論していただきました。今回は、30分ごとに少人数グループを入れ替え、様々なテーマを議論するワールドカフェ方式でふらっとークを行いました。

議論の場へのニーズが現れた結果

特に地域の皆さまの強い関心を集めたテーマは「農地の今後」でした。女性編では農業を続けたい意見とその他の土地利用への転用を考える意見が見られました。近年高まる防災意識を反映し、農地の防災的役割を守るために耕作を続けたいという意見も挙がりました。一方男性編では、課題として労働者不足があげられ、農地の集約や新規就農者の呼び込みについて議論が行われました。いずれも実現のためには体制を構築する必要があるものの、現状のままでは厳しいという意見が出ました。ふらっとーク開催後に行ったアンケートでは、次回以降のふらっとークを希望する声が多く見られ、こうした地域の皆さま同士の意見交換の場へのニーズがあることがわかりました。また複数の方から、テーマの意見を共有し合うだけでなく、解決に向けて話し合いたいというご意見を頂きました。

2021年度以降、こうした誰でも参加できる議論の場を作る活動を継続して行くとともに、回を重ねる毎に解決案などのアウトプットを意識したテーマ選択をしていく事を検討しています。



▲アンケート「特に関心の高かったテーマは？」に対する回答

04 2020年度の活動①

2020年

9月

GIS・農地調査

分家住宅調査

通り門調査

11月

都市計画キャラバン

2021年

3月

写真展・シンポジウム

GIS・農地調査

まちの将来像を検討する際に根拠となる客観的なデータは欠かせません。コミュニティラボでは、小布施町に在住/帰省中の町内学生と協働して小布施の農地に関する情報を電子化し、地理情報システム(GIS)で分析できる環境を構築し、分析をスタートさせました。

【実施時期】2020年9月～

【調査手法】町内調査・GISを使用した分析

【参加人数】町内学生3～8名

データに基づく小布施の将来像

実現可能性の高い地域の将来像も検討していく議論の土台として客観的なデータに基づいた現状把握や将来推計が重要です。特に“どのような地域にしたいか”を考えるためには、まちの構造や土地利用、住環境を図化・空間的に分析できる地理情報システム(GIS)が有用です。

本ラボでは、小布施町における将来像の議論の土台とするためのGISを用いた空間的なデータ分析と提案を行うことを目的として、情報の電子化・農地調査を実施し、GISで分析できる環境を整えました。

分析のためのデータ整備・収集

2020年度本ラボでは、必要となるデータの収集・整備に注力して活動を行いました。

まず、農地台帳の電子化を行いました。既に紙で存在していた小布施町役場の農業振興地域整備計画書をもとに、分析で使える形にするためデータの電子化を行いました。この作業は町内学生が中心となり進めてくださいました。町内学生の皆さん、本当にありがとうございます。東大チームのメンバーはオンラインでGISの操作方法等、指導・サポートしました。

次に、農地について調査を行いました。電子化した農地台帳に記録されている情報と実際の農地の使われ方を比較するため、町内に赴き1つ1つの農地の実態を目視で調査しました。

その他に、建物・土地の用途の情報や浸水想定区域、開発規制の緩和が行われた区域(都市計画法34条11号)など、今後の分析に使うと考えられるデータを収集し、分析に使える形に整備しました。

	青地	白地
囲み型	A	B
飛び地型	C	D
3411隣接型	E	F
3m以上浸水想定地域内型 (浸水高は2020年版ハザードマップを参照)	G	H

▲農振法の区域種別に着目した地区の類型化

データ化による利便性とわかりやすさの向上

農地台帳の電子化の結果、農地データの可視化が格段に行いやすくなりました。また全体の俯瞰から区画ごとの詳細な検討まで、多様なスケールで小布施のまちの構造を見ることができるようになりました。

また、小布施町に関する様々な情報をGIS上に統合することで、地図同士を組み合わせることも可能になりました。例えば、浸水想定区域にある建物の数や農地の面積など、一つのデータでは計算できなかった情報がGISを使うことで計算できるようになります。

データを活用した類型化と今後の展望

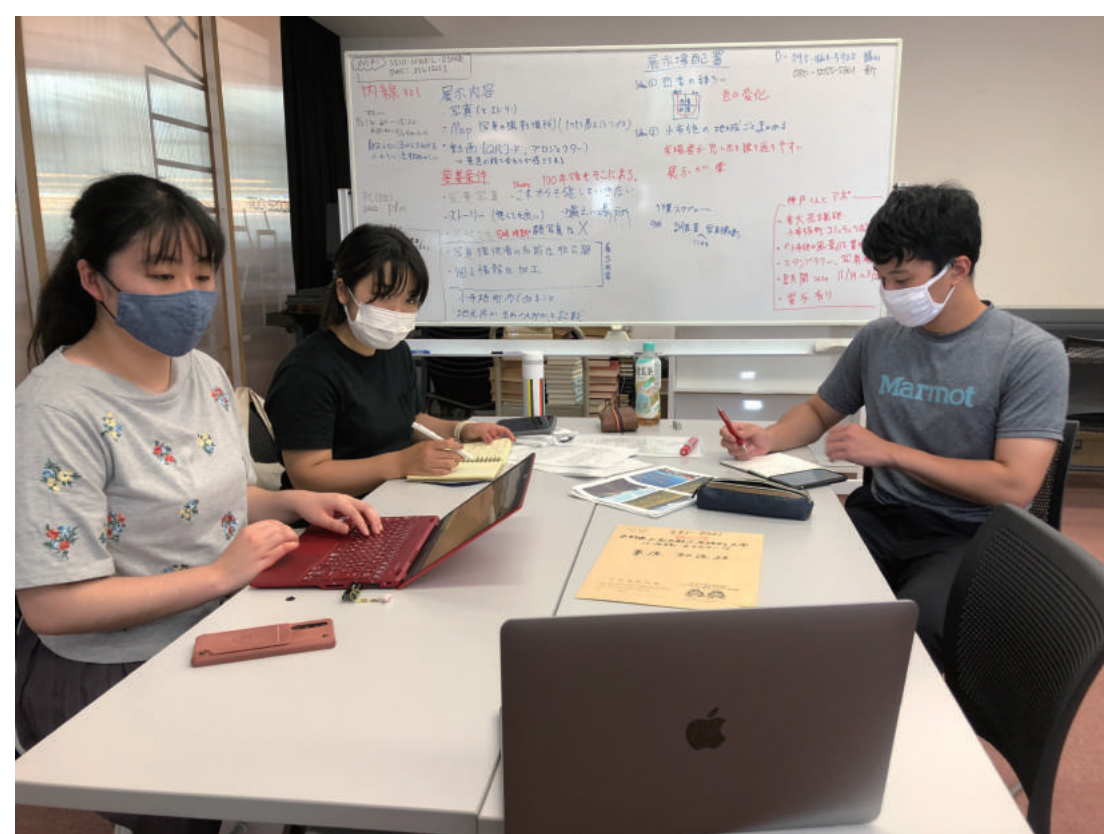
最後に、地図を細かなスケールで見ることができると利点を生かして、農振法に指定される区域の種別に着目して地区を類型化しました。また類型ごとに将来の課題や資源について分析を行いました。

これらの分析の結果は、長野県内の行政が参加する情報交換会「都市計画キャラバン」で発表し、都市計画・農政の両サイドの方から、大変参考になる意見をいただきました。

2021年4月以降、都市計画キャラバンで発表した内容をさらに発展させ、数字に基づいた客観的な分析を進めていきます。小布施の将来像の議論を実現性の高いものにしていくために、わかりやすく実用的な分析結果を示していきたいと考えています。



▲町内学生とのオンラインミーティングの様子



▲町内学生の作業中の様子

具体的なデータに基づいた計画策定のため、詳細な調査やデータの整備を実施

通り門調査

小布施町には「通り門」と呼ばれる特徴的な建築物があります。景観的にも空間的にも地域の重要な資源として活用する方法を探るべく、その分布や利用実態、成立過程を調査しています。

【実施日】外観調査:2020年9月3日,4日

アンケート:2020年9月下旬~10月

【調査手法】外観目視,アンケート

【結果】外観調査:185件

アンケート:76件回収/176件配布



▲小布施町で見られる通り門

小布施の学生による現地調査

まず東大メンバーがGoogleストリートビューを用いて確認できる範囲で町内全域の通り門と思しき、道路から敷地内への半屋外の通路を持つ建築物をリストアップし、それをもとに現地で実際に目視の調査と、ストリートビューでは確認できない範囲の調査を町内学生にお願いしました。この結果185件が通り門の特徴を持つ建築物として確認されました。

また、所有者が判明している176件について、所有者様にその利用状況や過去における利用についてのアンケートを実施し、76件の回答を得ました。

今後の展望

現在、外観調査とアンケートの結果を併せて集計・分析しており、右の円グラフのように、形態が類似する長屋門についての研究報告の内容とは明らかに異なる興味深い結果も出てきています。今後、さらなる分析やインタビュー等の追加調査を通じ、建築物が通り門たりえる条件・定義の導出、通り門の成立過程の解明をすべく、進めて参ります。

分家住宅調査

分家住宅の建設に関わる手続きや土地利用の実態を把握するため、分家住宅建設経験者を対象に調査を行っています。調査から得られた結果は、現状の制度の改善へつなげていきます。

【実施時期】2020年9月～

【調査手法】アンケート調査・インタビュー調査

【回答者数】アンケート:15件、オンラインインタビュー:1件

市街化調整区域と分家住宅

都住地区は、ほぼ全域が市街化調整区域とされていますが、区域内に生活の拠点を持つ本家から世帯が分かれて、分家としての世帯が必要とする分家住宅は、建築が認められます。しかし、都住地区にかかる複数の制度により、分家住宅建設にも様々な手続きが必要となります。そこで、分家住宅建設経験者へのアンケート調査・インタビュー調査を行いました。

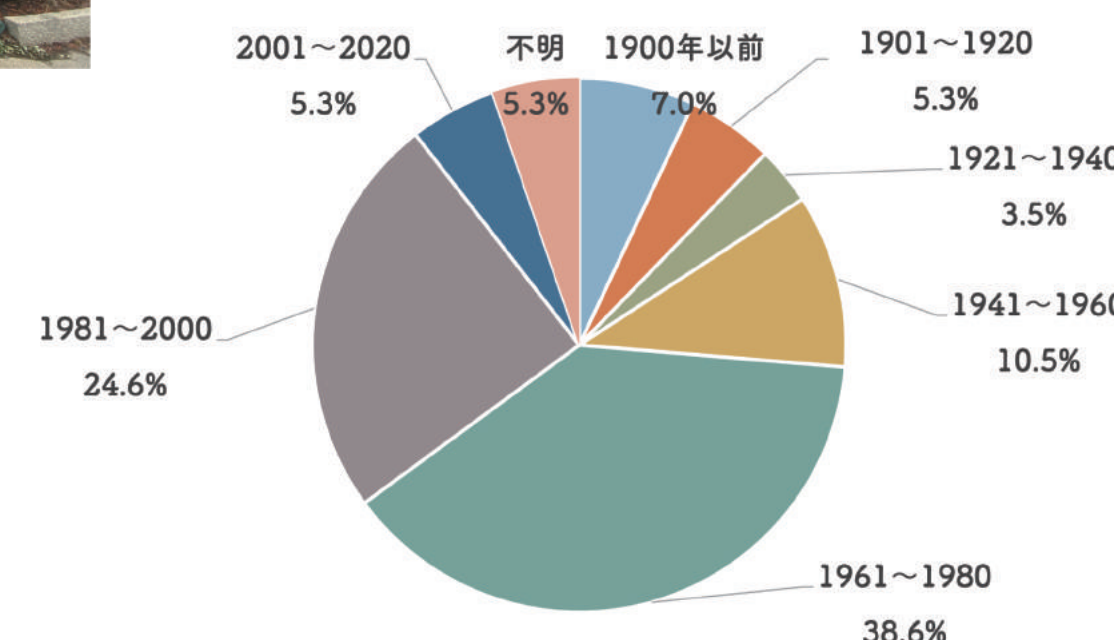
調査から示唆された、今後の可能性

アンケート調査の結果からは、生活面から見た分家住宅建設の理由として、結婚や子育てが多いことや、分家住宅建設の手続きに想定より時間や費用がかかり、住民の負担となっていることが分かりました。これらから、制度を整え、分家住宅建設に関わる手続きを簡易化することで、若い世代の定住につながる可能性があることが示唆されました。

また、インタビュー調査では、分家住宅の建設地が、周辺環境のみでなく農地の作物等も考慮して決められていることがわかりました。このことから、農地を作物によってゾーニングすることで、住宅建設地をある程度コントロールできる可能性があると言えます。農地のゾーニングは、営農環境と居住環境の両立を図るための一つの手段として、今後も可能性を検討していきたいと思います。



▲通り門を地図上にプロットする様子

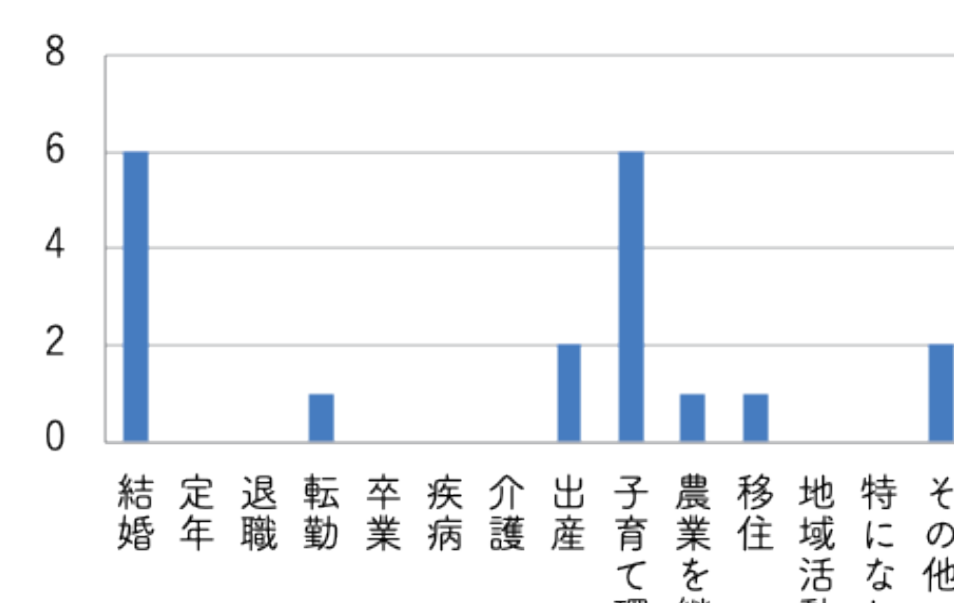


▲通り門の建築時期(n=57)
半数以上が1960年以降の建築であり、他県の長屋門の事例とは違う様子がみられる。

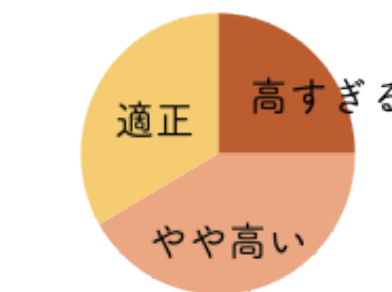


▲農地と住宅が共存する都住地区

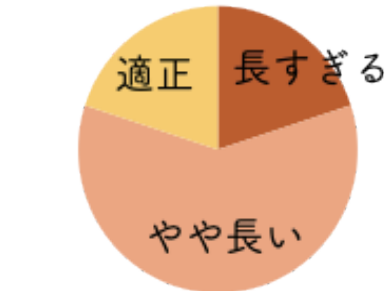
分家住宅の建設理由(生活)



実際かかった費用



実際かかった期間



▲アンケート調査の結果(抜粋)

05 2020年度の活動②

2020年

9月

GIS・農地調査

分家住宅調査

通り門調査

11月

都市計画キャラバン

2021年

3月

写真展・シンポジウム

都市計画キャラバン

都市計画キャラバンとは、長野県が主催する各基礎自治体の「まちづくりに関する意見交換の場」です。ここでは、今までの調査や今後の方針などを報告し、フィードバックやアドバイスをいただきました。

【実施日時】 2020年11月10日(火)

【実施場所】 小布施町役場(東大チームはオンラインで参加)

【参加人数】 21人

地区計画策定の提案

本ラボは、小布施町での集落地区計画の策定・運用を通して持続可能なまちづくりを実現しようとしています。そこで、移住や農政・都市計画に関わる県や町の職員の方々が多く参加する都市計画キャラバンで“集落地区計画の策定を目指す”という方針を示すことにしました。そのため、過去5年間でやってきたGIS分析や集落全員アンケート、農地調査などの研究結果を報告・共有しつつ、なぜ集落地区計画が適切か、を論理立てて発表しました。

発表後は意見交換を行いました。参加した職員の方々からは丁寧な分析とデータの可視化に大変な好評をいただくことができました。ありがたいコメントもいただくことができ、大変有意義な意見交換の場になりました。

当日の議論の紹介

— これからの期待

「ここまで詳細に調べてもらったので、作物の状況なども含めた計画の提案をすると新しいものができるのではないか。」

— 具体的に進める必要性

「これから小布施町に移住してくる方に対しては、農業をやりながらコミュニティを形成していくといったような小布施らしい土地利用のコントロールが必要になってくる。そのためには、農業も都市計画もまちづくりも全てを包括的に考えなければならぬ、難しいけどアプローチすることが大切である。一度あるべき姿を模索しながら、東大側と連携していく。」

以上のような議論を行いました。このように参加した職員の方々と今後の方向性を共有することができました。今後の小布施町の持続可能なまちづくりに取り組んでいくにあたって、この協力体制を築きながら町と向き合っていきたいと考えています。



▲東大チーム オンライン発表の様子



▲発表後、資料を囲んでの議論

コロナ禍で生まれた、新たな協働のかたち

COVID-19の流行に伴い、従来のように直接東大の学生が町内で調査をすることが困難となりました。そこで2020年度は多くの調査・企画が、東大チームと小布施町に在住/帰省中の町内学生がオンラインで協働する形での実施となりました。

東大の学生は各タリモートで参加し、zoomやslackなどのデジタルツールを利用しながら町内学生とコミュニケーションをとることで、従来の町内での調査に近い自由度での活動を実現しました。

また町内での活動は、町内学生が中心となって進めてくださいました。2020年度夏には11人、2021年度春には6人の学生が参加してくださいました。シンポジウムや写真展についても、町内学生にお手伝い頂き実現することが出来ました。本当にありがとうございます。

オンラインによる調査・研究は制約や限界を感じる点もありましたが、小布施町にゆかりのある町内学生と協働できる良い契機ともなりました。東大チームだけでは持ち得ない視点を得られ、非常に刺激的でした。今後もこういった形での交流を続けて行きたいと思っています。



▲町内での活動の様子

5ヶ年度の調査・活動成果に基づいた今後のプランを行政・地域の皆さまと共有

写真展・シンポジウム

小布施の未来像を考える手がかりとして、地域の皆さまにとっての未来に残したい風景を写真展という形で共有しました。

地域の皆さまが魅力に思う風景を探し出す「オンライン写真展」

【実施期間】2020年6月-

【実施方法】町報・月報の紙面上

「理想の小布施町の未来像」を理解するために、地域の皆さまが魅力に思う風景の写真を集めて、紙面上での写真展示を企画しました。

これまで小布施町発行の町報や本ラボ発行の月報にて募集宣伝や応募写真を目にした方も多くいらっしゃると思います。まずはこのように紙面上で地域の皆さまが思う小布施町の良い風景を共有してきました。おかげさまで累計約70枚の写真が寄せられました。

分散型写真展「たどる、ふちどる、いろどる」

【実施期間】2021年3月12日-3月21日

【開催場所】おぶせミュージアム・中島千波館内木造館 他

寄せられた写真からもわかる通り、小布施町には様々な魅力があり、人によっても見え方はそれぞれです。この多様な魅力を、紙面での紹介に留めてしまうのはもったいない。地域の皆さまと共有し、向き合う機会をつくりたい。そのような想いから、本ラボでは2020年夏より小布施町出身の大学生たちと、町内開催の写真展を企画しました。

「たどる、ふちどる、いろどる」というテーマには、思い出や風景をたどり、写真でふちどりながら、心をいろどること、という想いが込められています。

展示場所は、おぶせミュージアム・中島千波館の一角にある木造館を主な拠点とし、北斎ホルのロビーやまちとしゃテラスの入り口・多目的室、高井鴻山記念館の回廊といった、複数の会場を設けました。これは、複数の会場を巡る中で自分の目で町の魅力に触れ、小布施町の魅力を再発見する機会とするためです。

もっとアクティブに魅力をたどってつくる「小布施三十六景」

【実施期間】2021年3月20日

【開催場所】小布施町内各所

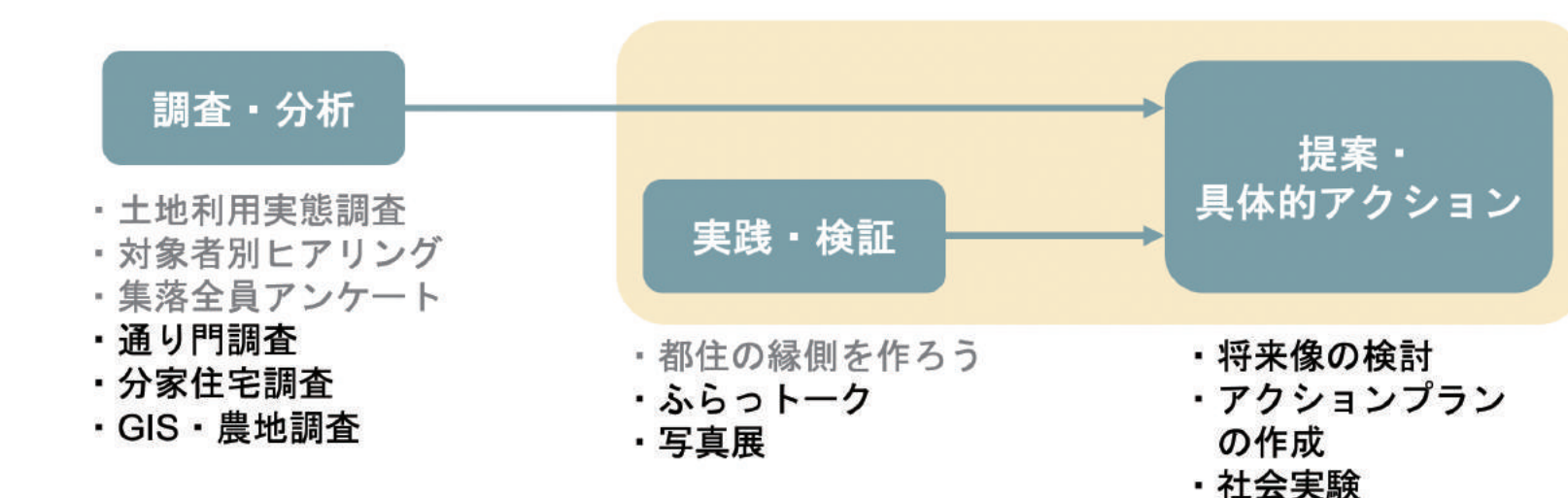
写真の展示会場だけでなく、展示会場以外の町中の魅力を探しに出るような機会を作るために考案されたのが、たどってつくる「小布施三十六景」企画です。小布施町出身の大学生に実際に小布施町の魅力的な風景を探してもらい、三十五箇所を選定し、マップを作成しました。企画ではマップを元に、地域の皆さま自ら回って写真を撮ってきて頂きます。

「三十六景」は小布施町に所縁がある葛飾北斎の「富嶽三十六景」に由来しています。「小布施三十六景」には、事前に選定した「三十五」景に、皆さんそれぞれのとっておきの「一」景を足し合わせることで完成させる、という想いを込めています。

今後の展望

調査・分析や実践・検証を生かした提案作成・具体的アクションへ

2021年度以降、これまで実施してきた調査・分析を根拠に、具体的な提案をしていきます。具体的には、提案作成に向けた更なる調査と、地域の皆さまの想いや実態を拾う実践・検証を重ねることで、地域の皆さまの想いに沿った提案作成及び具体的アクションの実践を目指して活動いたします。提案作成や具体的アクションについて検討している事としては、GISなどを活用して集めた情報から地域の将来像を検討する事、アクションプランを作成する事、低未利用の空間活用などの社会実験を行う事などがあります。



▲調査・分析、実践・検証、提案・具体的アクションのフロー図と具体的内容

写真展企画～8月・9月～



▲月報による「オンライン写真展」の様子



▲分散型写真展「たどる、ふちどる、いろどる」の様子

シンポジウム「あなたと描く小布施の未来」

本シンポジウムは写真展の開催と関連した企画となっています。「風景」という観点から、日常の小布施町の魅力や未来に残したい小布施町の姿を考える。そして、この「風景」という視点を日常の生活の中に持ち帰っていただき、小布施町の未来について今後も考えていきかけとする。そのような機会となることを目指して、シンポジウムを企画・開催しました。



▲東大チーム オンラインでの集合写真

今後とも、ご協力・ご支援の程、
よろしくお願いいたします!!